市の歴史年表

地質時代	御坂層形成化石	暖流系化石 ○レピドキクリナ、シオジブシナ（有孔虫、河口湖北岸天神峠） ○サンゴ ○オパキユリナ（西桂町下暮地殿入） ○アスツクリクリペウス（ウニの化石、西桂町不斗尾沢新倉マムシ沢） ○二枚貝、巻貝、カキ等26種（猿橋町ダコツ沢、上野原八ツ沢、暮地鉄沢）植物（浅海性、淡水性） ブナ、ニレ（大月市初狩、河口湖周辺） 亜炭層 サメの歯、テングのつめ(下吉田不動沢、石屋沢)
	富士山火山噴出物	安山岩、凝灰岩、集塊岩
	富士五湖成る	新月形の湖―宇津湖―石花海（せのうみ）河口、西湖、精進、本栖、山中
	アオツナマグナ	小舟山（下吉田）桂川断層
先史時代		縄文式文化の遺跡として、たて穴住居跡が発見されている 東桂地区 十日市場向原　カソリE（中期） おいしがね　カソリⅡ堀之内Ⅰ（後期） 御所海戸　阿王台（中期）、カソリE 古渡原　阿王台　勝坂式（中期）カソリE 下山梨　カソリ 山梨マルビ 八ツ沢 谷村地区 法能(1)　諸磯式（前期）カソリ式E 〃 (2)　安行式Ⅲ（晩期）カソリ式E、諸磯式 十二割海戸　弥生式をふくむ 戸沢金山　茅山式（早期）諸磯式A・B・C・堀之内式 引の田　押型諸磯、カソリ、堀之内、安行 戸沢西畑　人骨、堀之内、カソリE 城の腰　弥生式 上細野 権現原 横吹 宝地区 正観寺　（川棚）諸磯式、カソリ式E 高畑　カソリE・B堀之内式 壁谷　堀之内式、勝坂式 古宮地 大野 農田　弥生式 牛の鼻　〃 牛石　勝坂式カソリⅡ・E 平栗　カソリ式 入道沢 禾生地区 古屋戸　諸磯式C・堀之内Ⅰ・カソリ式E・B 小形山松葉　安行式C 中谷　勝坂式、花輪台（早期） 大棚 亀石　（川茂）丸石 盛里地区 尾崎原　諸磯式B・堀之内Ⅰカソリ式E 日影　〃　〃　〃 与縄原アケ山〃　〃 大平　安行式、、石ゾク、夏島式（早期） 落合　勝坂式 神門　夏島出

大化1年	646	国郡里制が施かれ都留市を中心に都留郡と呼ばれる。
和銅2年	709	佐伯公陰すでに郡内に入り領地して、法能に住吉神社を建てる。
神護景雲1年	767	万葉集がこのごろでき、都留の歌「室萱の都留の堤の成りぬがに児ろは言へどもいまだ寝なくに」あり。
延暦3年	784	加藤景長が都留郡を治める。
〃 16年	797	甲相国境争う（都留郡鹿留村東といし沢）道志は相模領にふくまれる。
〃 19年	800	3月14日から4月18日まで富士山爆発して河口湖となる。
延喜15年	915	甲斐から絹35匹を朝廷に献上する。
永観1	983	都留郡7郷。相模、古郡、福地、多良、加美、征茂、都留
建久2	1191	頼朝富士浅間神社に参拝、鎌倉に幕府を開く、鍛治屋坂希代氏頼朝にやじりを献じ賞せらる。
建武1	1334	建武の中興、護良親王鎌倉の土牢で殺される。雛鶴姫は、従臣藤原宗忠菊地武光、馬場正国らと首級をもつて、小田原から青根村を経て秋山村無生野からこの地にくる。

貞和１年	1345	岩殿山（大月市）に合戦あり。
〃　２年	1346	宝境寺（東甘）を開く（開山鶏岳永金和尚、開基義雲和尚）
〃　４年	1343	水上山西願寺を開く（開山大江広元開基西願法師）
応永23年	1416	武田信満、上杉憲秀と都留郡で戦い敗れて、木賊山にて自殺
永享５年	1433	富春山桂林寺（金井）を開く（開山格智禅師、開基小山田出羽守、中興開基小山田信茂）
延徳４年	1492	向富山用津院（金井）を開く（開山宗俊禅師、開基小山田信有）甲州乱国となりはじむ。
明応１年	1492	谷村全滅、大きき、人馬多く死す。
永正１年	1504	12月国中に合戦あり、都留郡勢まける。小山田弥太郎など討死。
〃　７年	1510	国中、都留郡和睦ができる。
〃　８年	1511	大儀山長生寺（羽根子）を開く。（開山一道光円、開基小山田信有）
〃　15年	1518	駿河と都留郡和睦ができる。
〃　16年	1519	武田信虎府中つつじが崎の館に移る。このころ小山田氏は武田氏の協力者となる。
大永７年	1527	小山田信有、中津森の百坪に館を建てる。
〃　２年	1529	中津森殿（小山田氏）内室、遠州へ行き姉と対面する。
〃　３年	1530	中津森館が焼ける。越中守と氏網は八坪坂で戦い、吉田衆まける。 大慈山円通院を開く。（開基梅岩全芳）居士
〃　４年	1531	補蛇山普門寺を開く。（開山天翁宗苑和尚）
天文１年	1532	小山田越中守死去。この年小山田氏谷村へ移る。（今の長安寺域） 信有谷村、岩殿山に要害城をつくる。水岸山泉福寺を開く。
〃　２年	1533	谷村焼ける。大道山宝泉山専徳寺を開く。（開基明岳周光和尚）
〃　４年	1535	相模の人数２万４千、小山田軍２千にて戦い大いに敗ける。
〃　９年	1540	種月院耕雲院（夏狩）を開く。
〃　12年	1543	宝池山正蓮寺（三吉）を開く。（開山澄空禅師・開基教善法師）
天文21年	1552	小山田出羽守死去、葬送供奉１万余と伝えられる。
		水源山永寿院（十日市場）を開く。（開山宗正禅師、開基弘法大師）
永禄１年	1558	石頭山長慶寺（夏狩）を開く。（開山東原西室）
元亀３年	1572	竜石山長泉院（鹿留）を開く。（開山東陽得春）
天正10年	1582	甲州一国が家康の領有するところとなる。 小山田信茂一族織田氏のためにほろぼされる。 都留郡の領主として、徳川の家臣鳥居右衛門元忠（１万８千石）
〃　17年	1589	徳川家康甲州に入り、都留郡を巡視して、宝鏡寺、長安寺を訪う。
〃　18年	1590	天正10年から18年まで徳川領、元忠在城する。これより豊臣領となり、三輪五右衛門近家の領地となる。
文禄１年	1592	加藤作内、朝鮮の役に従う。美濃国黒野に移る。浅野左衛門氏重（浅野長政の臣）郡内を領す。
〃　２年	1593	浅野長政甲州に入る。左衛門氏重家老となる。

〃　３年	1594	谷村勝山城を谷村の西南八窪山に築き、大手をかぎつて上谷村下谷村にわかつ。　城下町の計画なる。 文禄検地から夏狩のうち、十日市場をはなし、４ヵ村とする。（夏狩、鹿留、境、十日市場） 文禄検地、18,418.2石ときめる。
慶長５年	1600	浅野左右衛門、浅野幸長と和歌山に移り、代つて鳥居土佐守成次が領主となる。（徳川領）
〃　６年	1601	成次谷村城に入る。寛永８年まで成次、淡路守成興二代32年を領地する。
寛永10年	1633	秋元但馬守泰朝、上州総社から谷村城にくる。領内に桑を植えさせ上州から新式の絹織機を移入して絹師にかしつける。
〃　13年	1636	十日市場谷村間の大堰を起工（15年完成）　このころから茶壺道中が始まる。谷村勝山城の北にお茶蔵をつくり、将軍用の茶を保存する。
〃　19年	1642	領主泰朝死す。富朝相続
明暦３年	1657	富朝死す。喬朝領主となる。
寛文３年	1655	海気（織色郡内）織りだす。
〃　５年	1665	領主による為替仕法はじまる。このころ絹紬の旅売はじまる。
〃　７年	1667	郡内大凶作、郡内一揆おこる。
〃　８年	1668	嘆願した村々の代表庄屋２名打首となる。日向惣左衛門（朝日）宮下惣左衛門（大明見）
〃　９年	1669	秋元喬朝、郡内検地、総村数111ヵ村、総高２万742石７斗８升５合検地改役人５名。検地の時、兵左衛門、今藤左衛門所持の聖徳太師像を徳重社太子堂にまつる。寛文年間秋元氏は家中の内職に郡内平(夏袴)を織らせる。この頃から織物が盛んとなる。今の家中川は織物染色等のため利用
延宝５年	1677	喬朝奏者番となる。
天和１年	1681	減租嘆願に郡内19ヵ村代表江戸秋元邸に出す。 ２月25日代表者７名金井河原で打首となる。 秋元喬朝若年寄兼寺社奉行となる。
〃　２年	1682	西鶴「好色一代男」に郡内じまあらわれる。　12月から１月の間、松尾芭蕉谷村にきて秋元家臣高山伝右衛門宅にとどまる。
〃　３年	1683	秋元喬朝、河口浅間神社を造営する。
貞享３年	1686	西鶴「好色五人女」に郡内じまあり。
元禄１年	1688	島絹、平絹、絹平などあらわれる。
〃　５年	1692	佐伯橋が落ちる。翌年その東に架ける。
〃　６年	1693	江戸松屋善助たちは郡内絹買所となり、買付けを独占。
〃　12年	1699	三代秋元喬朝は老中に任ぜられる。
〃　16年	1703	郡内織に綾が考案される。
宝永１年	1704	このころ郡内織にしま、平に加えて綾が考案され多様化する。
		秋元喬朝川越へ移る。このときから谷村城は廃城となり、徳川幕府の直轄となる。（泰朝～富朝～喬朝３代73年間）秋元家老高山甚五兵衛の宅を代官陣屋とする。　柳沢吉保甲州３郡を領して甲府城主となる。
享保５年	1720	近松門左衛門「心中天の網島」に郡内織とある。
〃　７年	1722	同上「心中宵庚申」に郡内じまみらる。

〃 16年	1731	「甲州噺」に海気は田之倉などと郡内織の地域別の解説みられる。
享保16年	1731	祖暁禅師が示寂した。（65才）
寛延３年	1750	米騒動おこる。
宝暦２年	1752	森島其進、森島弥十郎生れる。
明和７年	1770	このころ「遊子方言」の中に「かゐき」（甲斐絹）あり。
天明４年	1781	羽根子から桂川を分水して小形山へ通ずる二ケ堰（600余間）ができ水田を開く。谷村代官中井清太夫、いも種を甲斐諸地方へ分けて作付をさせる。（せいだいも）の名を残す。 このごろ郡内じま八丈、黒八丈がさかんに織られる。
文化12年	1815	御正体山、妙心上人死す。（ミイラとなる）
文政４年	1821	森島其進歿す。（60才）
天保４年	1833	川茂小形山「二ケ堰」が完成して水路を開く。 平栗村、柄杓流川から用水路を開く
〃 7年	1836	五穀みのらず都留郡農民一揆起る。８月谷村の米商人数戸をおそう。
〃 13年	1842	代官佐々木道太郎、手代平塚平太郎幕府の許可を得て谷村に教諭所を設ける。
嘉永４年	1851	興譲館を開き一般子弟を教育する。これが明治４年谷村学校となる。 境村、天野開三、江戸品川のお台場を築造
安政２年	1855	江戸の俳人、田川卓郎、谷村に遊び郡内紀行「庭日より」を刊行。
明治２年	1869	甲斐府を廃して、甲府県とし郡内谷村に支庁を置く。
〃 4年	1871	甲府県を廃して山梨県をおき、土肥実匡が県令となる。 小野、熊井戸、菅野合併して開地村となる。 興譲館を谷村学校とする。
〃 5年	1872	県庁内に山梨裁判所をおき、谷村に谷村区裁判所をおく。 谷村支庁を廃して、出張官をおく。谷村郵便局をおく。
〃 6年	1873	谷村区裁判所を廃す。谷村、金井、大幡、鹿留、平栗、夏狩、三吉小学校開校　ウイーン万国博覧会へ銅屋与次衛門らが出品して入賞する。 「海気」と銘記してある。境、天野開蔵父子、東京新道（東京〜甲府）の計画書を県へ出す。
〃 8年	1875	上谷村、下谷村合併して谷村となる（１月19日）川棚、薄原、平栗、加畑、大幡、金井、中津森村合併し宝村となる。 四日市場、古川渡、川茂、小形山、田野倉、井倉村合併し禾生村となる。 与縄、朝日馬場、朝日曽雌村合併し盛里村となる。 十日市場、夏狩、鹿留、境村合併し桂村となる。 法能、戸沢、玉川村合併し三吉村となる。田野倉、昇小学校開校
〃 9年	1876	左界、誉索、盛里、尾崎、開地小学校開校
〃 10年	1877	谷村区裁判所をおき、都留郡を管轄す。 県病院谷村分院ができる。谷村警察署を設ける。
〃 11年	1878	郡制を施き都留郡が２郡に分れる。南都留郡町村役所を谷村におく。 谷村の小林宇十郎、同サダは熊本県知事富岡敬明に招かれて県営勧業場で甲斐絹の製織の技術指導をする。
〃 12年	1879	公設消防夫設置する。政伝小学校開校 （開地）谷村にコレラ病発生。谷村座できる。
〃 13年	1880	猿橋警察署出張所を谷村におく。

〃 17年	1884	饒益銀行を谷村におく。宝鉱山試堀が行われる。 茨城加波山事件の赤井景韶、石川島監獄を脱出して宝村に潜入。
〃 18年	1885	谷村大火あり、100戸焼失。
〃 19年	1886	南都留郡に郡立色染所開設、県令を知事と改め、藤村紫郎知事となる。
〃 20年	1887	郡立南鶴高等小学校、長安寺を仮校舎として開校同25年に学制の改正で廃校
〃 22年	1889	町村制改正により戸長は村長となる。
〃 25年	1892	谷村高等小学校開校する。
〃 26年	1893	桂村分村東桂村、西桂村となる。
〃 29年	1896	甲斐絹業組合結成 谷村は谷村町となる。（３月７日） 南都留郡立染織学校を谷村町におく。
〃 30年	1897	このころから夏狩特産の五裏（いつうら）が織りだされる。 南北都留染物同業組合が結成される。
〃 33年	1900	県立中学校都留分校を谷村町におく（同36年大月へ移転する）
〃 36年	1003	富士馬車鉄道会社、小沼から大月間営業開始。 谷村電燈会社創立出力70馬力、燈数1,200個
〃 37年	1904	谷村町営上水道の計画 宝鉱山開鉱
〃 38年	1905	県立工業試験場設置される。南都留郡甲斐絹同業組合が設置される。
〃 39年	1906	南都留染織学校を県立工業学校とする。 私立青藍幼稚園設立
〃 40年	1907	大水害、宝村、田畑48町歩人家92戸、盛里村田畑12町歩人家９戸などを流失。米沢から力織機を購入して、甲斐絹の機械化をはかる。
〃 42年	1909	甲州八端織物始まる。
〃 43年	1910	工業学校を都留中学校とする。
〃 44年	1911	十日市場、夏狩、左界、鹿留小学校を合併し、東桂尋常小学校とする。
大正２年	1913	鹿留発電所創設される。
〃 3年	1914	夏狩大火41戸焼失する。
〃 6年	1917	広幅力織機、郡内で100台に達す。 町立谷村実科高等女学校設立される。
〃 7年	1918	禾生村大火21戸焼失
〃 8年	1919	谷村町営火葬場できる。
〃 9年	1920	南都留郡立実業学校開校 谷村発電所創設
〃 10年	1921	谷村町上水道工事着工
〃 11年	1922	上水道工事完成 夏狩発電所創設
〃 12年	1923	工業学校へ郡立実業学校併置し、谷村工商学校に改める。 町営谷村発電所を創設する。
〃 13年	1924	川茂発電所創設される。

〃　15年	1926	谷村町職業紹介所開かれる。
		このころ谷村八端にジヤカード応用の紋八端があらわれる。
昭和２年	1927	谷村実科高等女学校、谷村高等女学校に昇格
〃　３年	1928	谷村町役場庁舎新築（８月）
〃　４年	1929	富士山麓電気鉄道開通（大月～吉田間）
〃　６年	1931	谷村高等女学校は県立谷村高等女学校となる。
〃　９年	1934	谷村町営公益質屋開業する。
〃　13年	1938	町営職業紹介所が国営となる。
〃　16年	1941	第二次世界大戦始まる。
〃　17年	1942	南都留地方事務所設置される。
		三吉村、開地村、谷村町に合併
		町営電気事業、関東配電株式会社へ統合
〃　20年	1945	第二次世界大戦終る。
		天皇陛下行幸町内織物工場御視察
〃　21年	1946	日本国憲法公布
		農地改革始まる。
〃　22年	1947	学制変更により６・３・３・４教育体制となる。
〃		地方自治法公布
		首長公選による第１回町長選挙行なわれる。
		谷村町消防署設置
		学制変更により谷村、東桂、宝、禾生、盛里中学校創設
〃　23年	1948	自治体警察発足、谷村町警察署設置
		甲府地方裁判所谷村支部設置
		甲府家庭裁判所谷村支部設置
		谷村簡易裁判所設置
		甲府地方検察庁谷村支部設置
		谷村区検察庁設置
		甲府司法事務局谷村出張所設置
		谷村検察審査会設置
		谷村労働基準監督署設置
		谷村電報電話局設置
		谷村土木出張所設置
〃　24年	1949	谷村町大火　339世帯焼失　罹災者　1,586人
		司法事務局谷村出張所を甲府地方法務局谷村支局と改める。
〃　26年	1951	谷村町警察署　住民投票の結果廃止となる。
		谷村職業補導所設置
〃　27年	1952	谷村町教育委員会発足
〃　29年	1954	谷村、東桂、宝、盛里、禾生の１町４ヵ村合併し都留市制施行(4月29日)

都留市史料拾遺

「秋元家甲州郡内治績考」より

殖産興業　秋元氏三代ノ郡内ニ臨ムヤ管ニ治水ノ道ニ力ヲ竭サレタル而已ナラズ、桑麻ヲ植エ機業を興シ殖産興業ノ上ニモ大ニ力ヲ傾注セラレタルコト、之ヲ旧記ニ照シテ歴々其ノ蹟ヲ認ムベキナリ。

古語菽麦　上州絹ヲ郡内ニ御移シ被遊候テヨリ、織出シ絹ヲ調ニ郡内ニ他所ヨリ参リ候切手ニテ居リハ(原本ノママ)、猿橋初通リ候事也、高山五兵エ其ノ比ノ大身五百石ニテ、絹師十二人有之候、其次ハ某高祖父四百五十石ニテ絹師八人差置候、御上初ハ千両ニテ桑モ三百面ノ運上ナク、後々ハ義舟公御代ニ絹運上二千両、桑ノ運上千両ニ罷成ル云々。

谷村の八朔祭　この八朔祭は古くから有名な祭礼として、近郷はもちろんのこと県下から関東までも知られた、珍らしい、はなやかなものとして江戸文化をしのぶ豪華な行事のかずかずは、だれといって知らないものはない。この地方ではむかしからこの祭礼を「屏風祭」ともいわれるくらいに、各町の会所（他の地方では頭屋といわれているもの）をはじめ、旧家の家々では自慢の屏風を立てた祭壇をもうけて、客を接待するのが長い間のならわしとなった。この祭りには「本祭」と「居祭」とがあり、本祭は神輿の巡幸とこれを迎える十万石の格式があるといわれる大名行列の先導ではじめられ、各町はそれぞれに催し物をつくり、その屋台は江戸文化の粋をあつめて、祭囃子もはなやかにくりひろげられる絵巻物ともいえよう。北斉、鳥文斉などの中幕、後幕、また竜、鳳凰の彫刻はすでに市の文化財である。

「居祭」は「胃祭」ともいわれ、時の景気、不景気によってきめられ、不景気の時が居祭と祭の寄合いできめられる、この時は五穀豊穣氏子の平安を祈願する。神輿の巡幸がないので祭の馳走で胃をわるくするから、その名があるという。

城山（森島其進両谷村から）　周廻凡ソ二十四町許桂川其東南ヲメグリ又源昌ニ至リテ北ニクジケ、又川棚村の方堀ヲメグラシ西ヨリ北ニメグリ、牛ガ鼻ニ至リテ桂川ニ合ウ、高サ一町バカリ上、平地ニシテ広シ、御茶壺ト云フ、宝永ノ頃マデ上ノ御茶壺毎歳宇治ヨリ此地ニ持来リ、山上ニ置シ故其名アリ、後其コト絶エテ今ハ宇治ヨリ直ニ江戸ニ至ル。

羽休郡と羽休庄　宝地区平栗の浅間神社の境内に、道祖神の字碑がある。その建立年代は安永七年（1778）で、その側面に「甲鶴羽休郡平栗村」とある、またかっての十日市場にあった「万蔵院」の鐘銘に「羽休庄」とあることが伝えられ、さらに四日市場「生出神社」の文書にも「羽休庄」の記載があったと伝えられ、これらを考え合わせると、加畑、平栗、厚原を中心に夏狩をもあわせてかく呼称されたものであろう。あるいは実際に鶴の生活がこの一帯にみられたのかも知れない。都留郡名の探求への手掛りとなり、その歴史的背景がたのしい。この名称は江戸時代以前そのままを伝えたものでもあろうか。

栗本鋤雲と谷村　鋤雲は弘化三年(1846)二十五才の折り、江戸より上野原を経て上吉田から富士登山した。その折りの「登嶽日記」がある。彼は幕府につかえ文久二年函館奉行支配組頭となり北海道開拓につくし、後に外国奉行となった人で、明治となって新政府に出ずに同七年(1874)報知新聞にまねかれて、文名大いにあがる、新聞界の先覚としてくりかえし論ぜられている。谷村に滞在したのは青年時代の鋤雲で、その日記弘化三年六月二日の項に　陰　午后時、白糸の瀑布に遊び、法泉寺を過ぎて海盤車の石に化したるを見る、　晩雨　とあり、同二十一日に「宿疾頓発、吐血二升、自ら三黄瀉心湯を作り連服……」にもかかわらず甲府へもしばしば往来し、七月五日谷村から籠にのって江戸へ帰ったらしい、代官役人の大越氏宅に滞留したとある。　**御茶壺道中**（坂田日記より）寛文十年戌六月二日（1670年）　御茶壺近に御通り被成候に付道橋繕、草取掃除、もり砂致御同心も御差出し候間、無礼無之様と町触廻状。